高知大学オープンクラスにおける教育効果

野角 孝一 吉岡一洋（人文社会科学系教育学部門）

Educational effect in open class of Kochi University.

Kouichi Nozumi　Kazuhiro Yoshioka
(Kochi University Research and Education Faculty, Humanities and Social Science Cluster, Education Unit)

要　約

本研究は高知大学で開講しているオープンクラスにおける教育効果を検証し、その意義を客観的に見出すことを目的としている。オープンクラスは一般の方々が学生と一緒に大学の授業を受講する形式のものである。これまでオープンクラスの教育効果については教員を対象としたアンケートに留まり、それが受講者にどのように還元されたのか、その結果が担当教員に提示がなされていない。そこで野角の担当する「日本画応用」および「日本画技法材料演習」をオープンクラスとして一般の方々に開放し、その２つの授業について検証を行う。検証方法はオープンクラスの受講者および学生を対象としたアンケートを実施し、各項目の回答について検証することでその教育効果を考察した。その結果、「日本画に対する理解が深まる」や「また日本画を描いてみたい」など肯定的な回答が多く、一定の教育効果が得られたことが判明した。

キーワード：日本画、制作、技法、展覧会

１．はじめに

文部科学省『平成26年度文部科学白書』「第３章生涯学習社会の実現」では生涯学習について次のような定義づけと、取り組みが明記されている[1]。

「生涯学習」とは、一般には人々が生涯に行うあらゆる学習、すなわち、学校教育、家庭教育、社会教育、文化活動、スポーツ活動、レクリエーション活動、ボランティア活動、企業内教育、趣味など様々な場や機会において行う学習の意味で用いられます。また、人々が、生涯のいつでも、自由に学習機会を選択し学ぶことができ、その成果が適切に評価される社会として「生涯学習社会」という言葉も用いられます。－中略－

現在、第２期教育振興基本計画に基づき、「自立」、「協働」、「創造」の三つをキーワードとする生涯学習社会の実現に向けて、学校教育の充実はもとより、社会教育、家庭教育、その他様々な場や機会における学習の充実・環境整備に取り組んでいます。具体的には、生涯を通じて一人一人の潜在能力を最大限伸ばしていく観点から、大学等における社会人等の受入れの推進や、多様な学習サービスの質の保証・向上、学習成果の評価・活用、学習活動を通じた地域活動の推進、現代的・社会的な課題に対応した学習等の推進など様々な施策を集中的に実施しています。

以上のように、生涯教育として学び続ける機会と場を提供することは大学の教員として必須であると考えられる。筆者はこれまで公開講座や出前授業などを通して一般の方々向けに開講してきたが、2017年度からオープンクラスとして授業を公開している。高知大学におけるオープンクラスとは大学の授業を一般の方々に開放し、学生と一緒に授業を受けるものである。ただし、科目等履修と異なって、オープンクラスの受講者には試験を行わないため、単位の

認定などは行われない。かつて高知大学で開講されていた公開講座は市町村へ赴く出張講座が主となり、大学で開講する公開講座は現在皆無となっている。大学の制度を応用して授業を開放するオープンクラスは生涯教育への寄与する上で重要といえる。

しかし、これまでのオープンクラスは開講するのみで、その教育効果を検証することはほとんどなかった。生涯教育については森田（2012）のシンポジウムなどを対象とした先行研究[2]はあるが、高知大学を対象とした先行研究は吉岡ら（2015）共に著した公開講座を対象とした「アートとヘルシーエイジング－高知大学における生涯教育の実践的研究－」のみである[3]。高知大学のオープンクラスを対象として教育効果を対象としたものはない。筆者が開講しているオープンクラスの受講者はこれまで開講してきた公開講座などの常連が多い。そのため、捉え方によっては何度も受講しているため教育効果が高いといえるが、受講者と学生の双方にアンケート調査を行うことでより客観的な教育効果の検証を行うことができる。

２．研究の目的

本研究では、筆者の担当する授業である日本画応用および日本画技法材料演習におけるオープンクラスの受講者と学生を対象としてアンケート調査の結果を用いて教育効果を検証することを目的とする。また当初の予定にはなかった授業で制作した作品を学内で展示することを提案し、オープンクラスの受講者および学生に対する質の高い作品の成果発表の機会とした。オープンクラスの受講者の成果発表はこれまで行われておらず、今回がはじめての試みとなる。日本画応用および日本画技法材料演習の受講者は【表１】の通りである。学生については教育学部で日本画を専攻する学生で、全員が制作や展示の経験者である。

【表１】授業履修者状況

日本画応用	学生３名	オープンクラスの受講者　６名
日本画技法材料演習	学生３名	オープンクラスの受講者　４名

３．「日本画応用」の授業内容

日本画応用は岩絵具という鉱物などから作られる絵具を使用して、制作する授業である。これまでの公開講座では多くて５回の講座であったため、水干絵具という微粒子の絵具を使用するに留まっていた。しかし、オープンクラスは一般の方々が大学で開講している授業を学生と一緒に受講するため、これまでの公開講座と比較して、受講時間が長く、制作する時間が長く確保できるという利点がある。日本画応用の授業計画については下記にまとめた【表２】。

【表２】　日本画応用授業計画

制作予定	制作工程
１回目(4/16)	ガイダンス　制作に必要な物品などの説明
２回目(4/23)	写生①　よく観察し、構図を検討する
３回目(5/7)	写生②　下書きを描き上げる
４回目(5/14)	写生③　水彩絵具で感じた色から絵具を置いていく
５回目(5/21)	写生④　仕上げを行う
６回目(5/28)	和紙をパネルに張る　写生をトレーシングペーパーに転写する
７回目(6/4)	下図を和紙に転写し、骨描きを行う
８回目(6/11)	墨ぼかし、胡粉下地
９回目(6/18)	地塗りを施す　モチーフの下塗りを行う
10回目(6/25)	モチーフの下塗りを行う

11回(7/2)～15回目(7/30)	モチーフの描写を行う
16回目(8/6)	作品の講評会

日本画の基礎となるのは写生である。授業では２Ｂ・Ｂ・ＨＢ・Ｆ・Ｈ・２Ｈなどを複数本用意し、写生を行う。日本画の写生はいきなり描かずに、匂いを嗅ぐ、触る、構造を把握するなど、五感で感じることや新しく発見することを大切にする。また描く場合は作品の重要な要素となる構図を検討して進める。通常写生は全体的に進めるが、今回はモチーフが百合であるため、花が咲く期間などを考慮して、先に描くあるいは後で描くなど部分的に描くことを説明した。さらに日本画では影を描かずに表現を行うが、よく理解していない反応を示した。そこでゴッホの作品と水墨画の作品の写真を実際に見せ、西洋と東洋のものの捉え方の違いを見せて説明を行った。日本画は大抵の場合、大学から勉強を行うが、最初に戸惑うのが日本画の捉え方である。現在の日本の教育では西洋の見方を用いて表現するため、影を描くことが当たり前であるが、日本画は本質的なことを捉えるために影は描かないことが一般的である。

制作の進め方については最初に口頭で説明するが、実際に制作してみないと分からない部分が多い。また、オープンクラスの受講者からどのように描いた方がよいのか分からないという質問が度々あるため、その都度説明を行って疑問を解消した。

特に質問が多かったのは、岩絵具の使用方法である。岩絵具は接着剤となる膠液と混ぜ合わせて画面に塗布するがその分量がわからず、岩絵具が乾燥した後に絵具が剥落した。または乾燥後の色が分からないという意見であった。そして「西洋画のほうがいいな」などオープンクラスの受講者全員が日本画の岩絵具の扱いにくさを感じていることがわかった。これは事前に予想していたことであり、描き進める中で少しずつ解消されていくと確信していた。

４.「日本画技法材料演習」の授業内容

前述の通り日本画の色材の扱いは難しい。そのため日本画技法材料演習もオープンクラスとして開放し、併せて受講することで、より深い学びとなるように配慮した。日本画技法材料演習の授業内容は次の通りである【表3】。

【表3】　日本画応用授業計画

制作予定	講義・演習内容	制作
1回目(4/16)	ガイダンス	下張り
2回目(4/23)	膠・筆・刷毛　刷毛の扱いとお手入れ	水張り
3回目(5/7)	胡粉*の解説・演習	胡粉下地
4回目(5/14)	日本画の顔料①　水干絵具・泥絵具・棒絵具	水干絵具による地塗り
5回目(5/21)	日本画の顔料②　天然岩絵具の解説Ⅰ　粒子の解説・絵具作り	ドーサ液*を引く（1回目）
6回目(5/28)	日本画の顔料③　天然岩絵具の解説Ⅱ　原料の解説・絵具焼き	ドーサ液を引き（2回目）
7回目(6/4)	日本画の顔料④ （新岩・合成・朱・藤黄・コチニール・辰砂の溶き方） 絵具の焼き付け・膠抜き	ドーサ液を引き（3回目）
8回目(6/11)	ドーサ液作り・箔の解説	箔押し*
9回目(6/18)	泥の解説・箔焼き	箔を焼く
10回目(6/25)	砂子・基底材について　屏風・軸・模写解説	ドーサ液を引き（保護ドーサ*）
11回(7/2)～ 15回目(7/30)	制作	
16回目(8/6)	試験	

＊胡粉‥白色系顔料。かつては鉛白を胡粉と呼んでいたが、現在では貝殻胡粉が一般的。授業ではホタテの貝殻由来の胡粉を使用した。

＊ドーサ液‥箔を押す際の接着剤として用いる。

＊箔押し‥箔を画面に定着させることを‘押す’という。

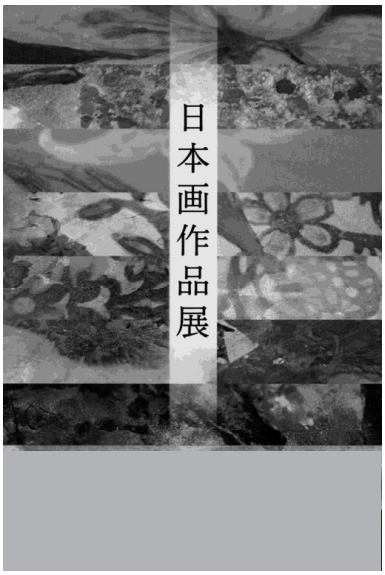
＊保護ドーサ‥箔が酸化することを防ぐ目的で塗布するドーサ液

【表3】に記載されている通り、日本画技法材料演習では各回で学ぶ内容を演習として行い、11回目から制作となるように内容を組んでいる。制作の方法として、支持体となる和紙を保護するための下張りや、胡粉や水干絵具の塗布、ドーサ引きなどを行った。その後で箔を押し、硫黄で化学変化を起こし、箔ならではの技法を試みた。オープンクラスの受講者や学生も箔を扱うことは初めてで、苦戦しながら制作を行っていた。その後は箔の化学変化した形を頼りとして、岩絵具や水干絵具で各々の制作を進めた。

５．授業作品による展覧会

日本画応用および日本画技法材料演習の授業を進めていく中で、オープンクラスの受講者や学生も真剣に取り組んでいることが見て取れた。そこで当初の予定にはなかったが、急遽展覧会の開催を提案したところ、全会一致で開催が決定した。展覧会名は「日本画作品展」と称し、展示にあたって作品の画題や技法などの他に、作品に関する想いなどをキャプションに記載することとした。その理由としてオープンクラスの受講者は技法などに苦戦しているが、時間をかけて制作することで作品に対して愛着などが感じられたからである。また、無意識に制作している場合でも、言葉で表現することで、自分の考えていることがはっきりする場合がある。さらに制作に対する生の感想を見ると、鑑賞の助けとなるため採用した。

また、展覧会に際して、DMの制作も併せて行った。制作は研究分担者のデザインを専門としている吉岡が担当した【図１】。全出品者の作品を撮影し、各作品の特法的な部分をトリミングし、画面に等分に配置した。完成したDMはオープンクラスの受講者と学生に配布し、高知大学のホームページにも掲載した。



【図１】日本画作品展DM（本論では出品者の名前は個人情報のため消してる）

日本画応用の16回目である本来は作品の講評であった時間を利用して、F10の百合の日本画９点と箔も用いた作品７点の展示作業を行った。展示についてはせっかくの機会であるのでオープンクラスの受講者に作品の配置などの検討を依頼した【図2】。受講者の話し合いが進まない場合は学生に助言をお願いするかたちで展示作業を進めた。展示を行うことで自分自身の作品や他の作品を客観的に見ることができる。その時間を少々確保し、最後にすべての作品

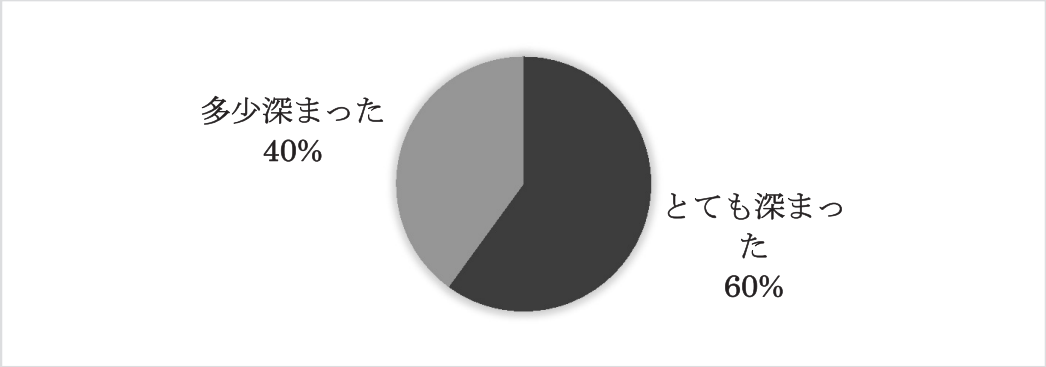
について講評を行い、良い点、改善点などを解説した。展示期間は約１ヶ月ほどであったが、教員、事務の方々、学生、オープンクラスの受講者やその友人などが鑑賞し、筆者のところに反響の連絡が多数あった。

【図2】オープンクラスの受講者による展示作業の様子

６．アンケート結果の分析

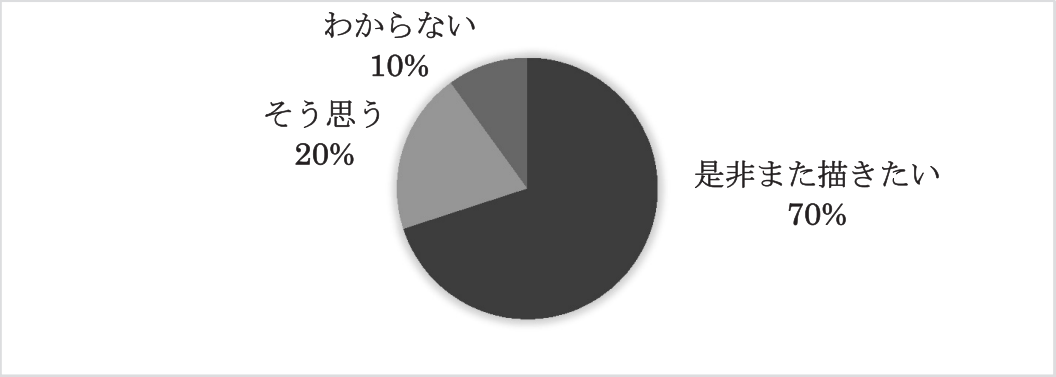
日本画応用と日本画技法材料演習および展覧会の開催を踏まえて、オープンクラスの受講者と学生を対象としたアンケート調査を展示作業後に実施した。アンケートは日本画応用と日本画技法材料演習の質問内容は同じである。

日本画に対する理解について、「全く深まっていない」「ほとんど深まっていない」「わからない」「多少深まった」「とても深まった」の５段階で尋ねた結果を【図3】に示す。５段階の回答の中で、「とても深まった」が60%、「多少深まった」が40%であり、全体的に見て日本画の理解が深まったと見てよい。



【図3】日本画の理解について

また日本画を描いてみたいと思いましたかという問いについては、「全く思わない」「思わない」「わからない」「そう思う」「是非描いてみたい」の５段階で尋ねた結果を【図4】に示す。また、その具体的な理由についても記述形式で記入していただいた。

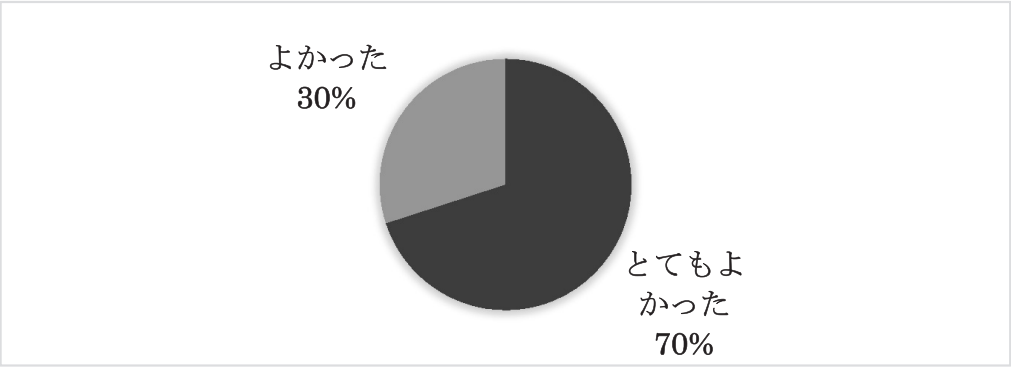


【図4】また日本画を描いてみたいかについて

１名が「わからない」と回答したが、その他は「是非描いてみたい」「そう思う」を90%が回答しており、手応えがあったことがうかがえる。具体的な理由の記述では、「さすが大学の授業だと思いました。」「岩絵具の色の魅力に魅せられました。」「花を水彩絵具で写生して日本画を描く時、写生と同じでなく、自分の色で描けたことで個性が出てきたところが面白かった。」「やればやるほど日本画の魅力にはまっていく感じ。きれいな色彩が浮き上げってくる。それが毎回楽しみ。」「絵具を塗る時と乾燥した後の色味が違うので難しい。」などの回答があった。

アンケートに描かれているように日本画の色材の扱いが難しい理由の一つが色の変化だと考えられる。筆者の観察では、時間を描けて制作する時間が長いほど、色材に魅力を感じている傾向がわかる。つまり色材に慣れてきているのである。

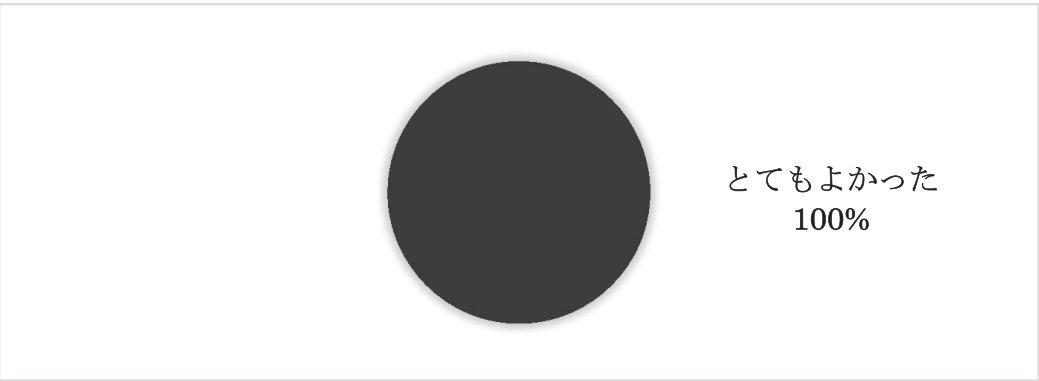
展覧会を開催することになって、よかったですかという問いについては、「全くよくなかった」「よくなかった」「わからない」「よかった」「とてもよかった」の５段階で尋ねた結果を【図５】に示す。また、その具体的な理由についても記述形式で記入していただいた。



【図５】展覧会の開催について

「とてもよかった」「よかった」が全体を占めており、開催は成功といえよう。また、具体的な理由の記述では、「自分のやる気が出るのと、一緒に描いている人の志気が上がった気がする。」「苦心して描いた絵が展示してもらえるとは‥自分では下手な絵でもよく見えるようでした。」「他人の作品のキャプションを読みながら観ると味わい方が違った」「展覧会でいろいろな絵のバランスを取るようになり勉強になった。」「それぞれの作品に個性があり、集めて展示することでまとまりが感じられた。」など、肯定的な内容が多かった。

学生へのアンケートでは通常の授業と比較して、日本画応用・日本画技法材料演習のようにオープンクラスの受講者が一緒に参加する授業での印象はどうでしたかという問いについて、「全くよくなかった」「よくなかった」「わからない」「よかった」「とてもよかった」の５段階で尋ねた結果を【図６】に示す。また、その具体的な理由についても記述形式で記入していただいた。



【図６】オープンクラスの受け入れについて

その結果、全員が「とてもよかった」と回答している。具体的な理由の記述では、「幅広い年齢や今までの経験の違いがあるおかげで、いろいろな味のある作品が見れて交流になる」「いろいろな方がいるおかげで空気が動く気がする」「年齢層が幅広いので感性が新しくなる」「刺激になるし、学生だけでなく地域の人と関わることができとても良い機会となった。」など、肯定的な記述ばかりであった。

7．まとめ

オープンクラスに開放している日本画応用および日本画技法材料演習は1学期の授業として開講している。その後にオープンクラスとして開講する2学期の日本画基礎には、さらに多くの受講者が参加している。オープンクラスに開放している日本画応用および日本画技法材料演習では授業中に他の人の作品を鑑賞する機会を増やした。それは途中経過であっても見ることで勉強になるからである。特に美術の実技では、自分以外のより多くの人の見方やものの捉え方、描く手順などを多く見ることが大切である。

前述の通り、日本画の制作は難しい。しかし、難しいからこそ技法書などを読むだけでは制作できない。そのため、大学での授業を通して学習することは意義があると考えられる。オープンクラスの受講者のアンケート結果にもあったが、日本画は難しいがそれだけでなく制作していく中で楽しさも生まれてきたことが見て取れる。また学生へのアンケートにも記述があったが、鑑賞の時間を設けることによってオープンクラスの受講者と学部学生が交流を持つことが出来きた。これは同じ授業で制作しているからこそ、オープンクラスの受講者と学生は共感できたと考えて良い。

単なる講義だけではこのような交流も持つことは難しく、実技ならでの長所といえよう。さらに授業の中でのちょっとした作業の際に、オープンクラスの受講者は学生よりも早く動く場面が多かった。それは学生より早く次の動き、つまり気配りを予想できたためである。それが学生全員の刺激となり、見習って早く動くことができるように成長し、授業全体の雰囲気が向上した。これはオープンクラスの受講者が様々な生活史を背景とした人生経験を有しており、それらに学生が触れるということはオープンクラスを開講する上でのいわば本質といえよう。今回のアンケート結果からも、オープンクラスの受講者だけではなく、学生への教育効果があったと推察される。

さらに制作においても、締め切りが近い状況において空き時間の教室の使用を認めた。とりわけオープンクラスの受講者の中には、30時間以上の授業外学習を行っている者もいた。作品の良い点は実際に描いている様子を見ていなくても制作が進んでいれば必ず分かる。時間をかけて制作する大切さを言葉ではなく、作品として表現しており日本画を専門とする学生への刺激となり、模範となっていた。

今後の課題はさらなる授業の開放である。アンケートの回答の中に特に実技の授業をオープンクラスとして開放してほしいとの要望が多数あった。たくさんの学びたい人に、学ぶための機会と場を提供するすることはやはり大学の使命であるため、今後も増やすことを検討したい。また、より多くの授業をオープンクラスとして開放することで、学生への教育効果の向上につながると確信している。

謝辞

本研究を実施にあたり、オープンクラスの受講者の方々および学生にはアンケートにご協力いただきまして、ありがとうございました。また、展覧会の開催にあたって、高知大学次世代地域創造センターの協力を得ました。記して感謝の意を表します。

引用・参考文献

1. 文部科学省『平成26年度文部科学白書』「第3章生涯学習社会の実現」
http://www.mext.go.jp/b_menu/hakusho/html/hpab201501/detail/1361552.htm（2018年11月27日参照）
2. 森田美佐「家族研究は家庭科と生涯教育にどのように貢献できるか」（『高知大学教育学部研究報告』第72号）、125-130頁、2012年3月
3. 吉岡一洋・野角孝一・柴英里・中村るい「アートとヘルシーエイジング－高知大学における生涯教育の実践的研究

ー」(高知大学教育学部教育実践総合センター紀要『高知大学教育実践研究』第29号)、59-67頁、2015年3月
4. 東京藝術大学大学院文化財保存学日本画研究室編『図解 日本画用語事典』株式会社東京美術、2008年5月